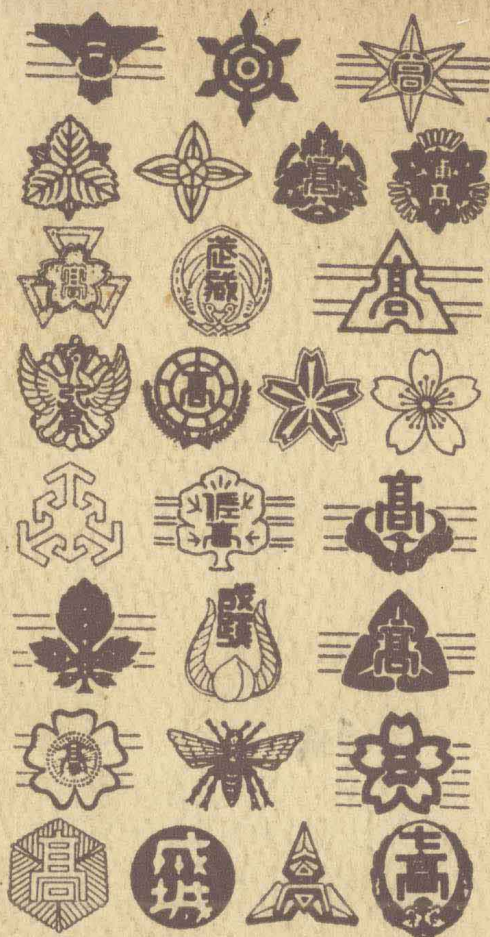




有紀書房刊

わが旧制高校時代

扇谷正造 編

あゝ玉杯に花つけて

あゝ玉杯に花うけて

——わが旧制高校時代

あゝ玉杯に花うけて

昭和42年 8 月 15 日	初版印刷	¥ 3 8 0 .
昭和42年 8 月 20 日	初版発行	

編 者	扇 谷 正 造
装 幀 者	小 西 啓 介
発 行 者	高 橋 巳 寿 衛
印 刷 者	大 久 保 泰 男

発行所	東京都文京区目白台2丁目3-21
	振替口座・東京 8 5 9 4 番
	電 話 943局 0411 (代) ~ 5 番

有紀書房

落丁・乱丁がありましたら、本社でお取り換えいたします。

はじめに

旧制高校の再評価が、このごろ盛んである。毎年の秋、NHK主催で行なわれる「旧制高校・大学予科」の寮歌祭は、年毎に盛んになっている。旧制六高のあった岡山では、昨年、創立六十周年を期し、六高卒業生が、大挙、押しかけ、乱舞したといわれている。四高の金沢には、毎年恒例のように、卒業生が、同期生相集まって、訪れるという話を聞く。

一方、旧制高校卒業生の名簿作りも盛んである。一高など、細かい活字で、ビッシリ組んでも、東京都の電話帳一冊ぐらいの厚さになるといわれている。

これらは、いったい、どういう事なのか。

第一に、これらの学校の卒業生が、現在、各界各方面の指導者層を形成しているからと思われる。つまり、左右をとわず功成り名遂げた人たちである。だから、フトコロ工合も、悪くない、という事もあろう。

第二には、「わが青春をいつくしむ」という気持である。旧制高校では、経済的、社会的、身分的には、いろいろあったにせよ、そこに暮らした人々は、人間として、完全に平等であった。

その生活を貫く、一本の太い線は「友情」という事であった。

「友の憂いに、われは泣き

わが喜びに、友は舞う……

という事が、文字通り、実現された世界であった。そこにあるものは、青春の持つ純粋さとエネルギイと感傷と、若干のデカダンスであった。遊ぶにせよ、学ぶにせよ、総じて、そこには八精いっぱい生きたVという充実感があった。

いまはどうか？

残念ながら、といわざるを得ない。新制高校では、大学入試のための準備に追われ、やっと入れば、今度は優とり競争が、展開されている。全部が全部とはいわないが、大筋は、そう見て間違いはあるまい。世相もかわったが、人の心もかわった。何よりも教育制度がかわった。それは、いい事か、悪い事か、私にはわからない。

第三には、もう卒業生はでない、という一種の、漠然たる悲しみである。ニューヨーク・タイムスの記者は、

「なぜ、君は仕事するか？」

と聞かれると、いちように、

「ニューヨーク・タイムスのコンティニュイティ（一本の灯）を守るために」

と答えるそうだが、後輩のもう出て来ることのない学校の卒業生というのは、後継者のない企業の社長か、子ダネのない亭主に似て、まことにハカナイ。そのハカナサが逆に、年々歳々、寮歌祭を盛大にしているのかも知れない。

*

しかし、待てよ、と私は答える。これは、よその国の話ではない。日本の国の出来事ではないか。しかも占領後、アメリカの教育政策を易々諾々と日本がうけ入れたため、かく相成ったのではないか。ドイツはさすがだった。ガンとして、占領軍による教育制度の改廃に抵抗した。とすれば、自分の国の教育制度は、自分たちの手で、どうにもなる事ではあるまいか。

本書編纂の第一の意味はここにある。いたずらに旧制高校礼賛や感傷のために、本書は刊行されたのではない。人間形成の場としての旧制高校の再吟味を狙ったのである。その事は、二十七人の方々の文をよめば、感得されるであろう。強くいえば、本書は、現行の教育制度を再検討するための一つの有力な資料、バクダンにならないか、という願いである。

いや、手近に一つ、最もいい例がある。

旧制高校の精神と制度をとり入れた国立高専の卒業生が、今日、各方面から歓迎されているという事は、そもそも、何を物語るのであるのか？ どこに原因するのか？

もとより、今日の学制において、旧制高校をそのまま復活せよとは望まないし、出来ることで

もない。しかし、その精神と、その運営とを、今日の時代にてらして再撰取する事は、ある意味で、緊急な事ではあるまいか。したがって、本書は、旧制高校（大学予科）の同窓生のみならず、むしろ教育政策実施当局に、よく味わってもらいたいと思う。

若い読者諸君には、君たちのパパ、あるいは、おじいさんたちの青春とはどんなものであったか、本書は、そういう意味の、//最も近い現代史//の役割をはたす事と思う。

*

最後に、ご執筆いただいた二十七氏の方々に厚くお礼を申しあげます。日常多忙をきわめているこれらの方々をして、本書に執筆させる動機となったものは何か？ たぶん//愛校心//じゃあるまいかと察せられます。そしてそれは、そのまま、いい意味の愛国心につながって行くものではあるまいか。

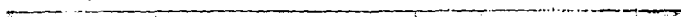
ご執筆、まことにありがとうございました。

昭和四十二年夏

編者・扇谷 正造



目 次





まえがき…………… 扇谷正造

激浪天に星を呑み…………… 石上玄一郎… 二

戦争前夜のウェットな青春…………… 泉毅一… 三

私の水高時代…………… 江戸英雄… 三

玉杯暫し地に捨てて…………… 遠藤慎吾… 四

貴族主義の砦の中で…………… 岡倉古志郎… 五

操山の緑と共に…………… 唐島基智三… 六

不幸な谷間で…………… 河竹登志夫… 六

我れ人生の朝ぼらけ…………… 北島織衛… 七

学問と友情との花園…………… 草谷晴夫… 一〇五





含羞と気取りの時代……………串田孫一……………二五

くるめくような思い出……………近藤芳美……………二三

もののけ先生のことなど……………波沢秀雄……………一四

はぐくんでくれた自由……………田所太郎……………一五

西田哲学との訣別……………力石定一……………一六

人生の花盛り……………津村秀夫……………一六

おおらかな雰囲気の中で……………田英夫……………一七

二人だけの送別会……………戸川幸夫……………一八

自由奔放な青春……………中島健蔵……………二五

教師への反撥……………長沼弘毅……………二五





英国型紳士の養成	中屋健一	三三五
校長から教わったもの	中山恒明	三三五
印象に残る講話	丹羽保次郎	二四八
南へのあこがれ	土方正巳	二五五
旧制と新制の青年像	丸山誠治	二六五
松山城下で	宮本顕治	二七五
旧制高校で学んだもの	諸井三郎	二八五
よき時代の風物詩	吉武信	二九五

カット 松谷春男



あゝ玉杯に花うけて

——わが旧制高校時代

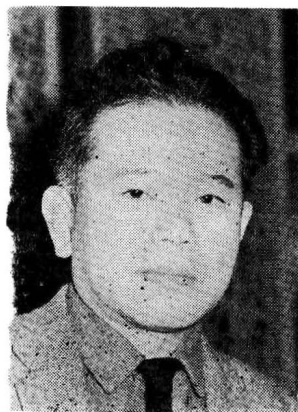
扇谷 正造 編

弘前高校のころ

激浪天に星を呑み

石上玄一郎

(作家)



弘前は津軽藩の古い城下町である。

通りにまで突き出た大きな廂の下には今なお封建時代の亡霊が低迷し続けているような町だった。市街を外れると岩木山麓のひろびろとした高原で、冬枯れの季節などまさに荒涼たるものがある。同じ東北でも私の育った岩手あたりに較べると、津軽の自然も人々の気性もだいぶ粗野で荒っ削りだ。

旧制弘前高校へ入ったのは昭和二年の春である。私がここを志望した直接の動機は盛岡中学時代、尊敬していた先輩に勧誘されたからであった。誰しも十七、八歳ぐらいでは自分の将来に関

して確たる方針など打ち出せるものではない。教師の影響や先輩の誘導が大いにものをいう年頃なのだ。

弘前の駅に着いたが、当時はタクシーはおるかバスもなかった。客待ちの乗合馬車に詰め込まれ、犬の皮を背負った馭者の鳴らすわびしげなラッパの響きを聞きながら行くと、われながら、これはとんだ処へ来たものだという気がした。しかも乗客達の喋っている津軽弁が、同じ東北育ちの私にも殆ど通じないのだ。いかにもさいはての国へ来たという流謫の感じである。この最初の印象は、それ以来、長い間、一種の憂苦となって私につきまとった。

弘高の校舎は八師団の兵営に通じる軍用道路の左側にあった。灰青色の木造二階建の中にマンサードの上った講堂の屋根だけが、一きわ高くそびえている。その校舎の背後にわれわれの入寮が並んでいた。南から南寮、中寮、北寮という順である。これも木造二階建で、定員二人の和室だった。

その頃の旧制高校は大いどこも全寮制度で、入学すると必ず一度は寮生活を送る規程になっていた。集団生活は苦手な私だったが、やむなく入寮して最初の一年あまりをこの「北溪寮」で暮した。たしか南寮の三十番で、階下の一ばん外れに当る部屋だったと思う。

入る早々、二階から降る寮雨に辟易し、「歓迎ストーム」に度胆をぬかれた。遠くから「デカシヨ」の歌声と共に大勢の足駄で床を踏みならす音が響いてくる。やがてその音が間近くなっ

たと思うと、彼等の中からいきなり剣道着姿の男が部屋に踏み込んできて、木刀を振りまわし剣舞をはじめた。新入生の私は部屋のすみで小さくなって、それを拝見するというわけである。かねて殺伐なところとは聞いていたが「これはたまらん」と思った。

そればかりか先輩達から学生同士が真剣をとって決闘に及んだ話や、街の愚連隊を相手に血の雨を降らした武勇伝などを聞かされて、すっかり怖^{おそ}気をふるった。

だが衝撃はそれだけではない、教授の教え方がまた峻烈をきわめていた。私の志望したのは文科乙類であるから、独逸語が第一外国語である。所謂「独法」という奴である。ところが中学では独逸語を少しもやっていないから、何もしらない。新入生としては教授が、「アー、ペー、ツエー」から教えてくれるものと予期している。独逸語の主任教授は国枝という、容貌魁偉な先生だった。この先生、発音も何も教えないうちに、ある学生を名ざして、巻頭の独逸文字でかかれた文章を読んでみるという。彼が読めませんと答えると、いきなり雷が落ちてきた。

「お前どういふつもりで高等学校へ入ってきた、今直ぐやめろ、やめっちまえ」といった調子である。その学生ばかりではない、甘い考えでいたわれわれ一同はすっかりふるえ上ってしまった。幸い級には早稲田高等学院から来た学生が二、三いたので、その連中に教えて貰って何とか読むことだけはできるようになった。

それやこれやで、高等学校へ入ったものの私は何となく憂鬱だった。それに私はいささか高等

学校というものに期待し過ぎていたようだ。そこをば「真理の探求」に余念のない学徒の集るところとばかり私は思い込んでいたのである。だが、いざ入学して級友達を見渡したところ、思索型の人物はごくまれで、多くは懷疑も煩悶もない楽天主であり、酒を呑んでは放歌高吟して大道を闊歩する豪傑気どりの型か、エリート意識で立身出世を夢みる巧利的な型か、大別して、その何れかであった。

だが半年たち一年たつうちに級友達の気心も分り、街の雰囲気にもなじんで行った。荒々しくよそよそしい北国の自然すら、何か神秘的な暗示でもあるかに、私には思われた。

二年目になると文芸部、弁論部、演劇部など趣味や傾向を同じくする者達が、しげんと寄り集ってグループを作るようになった。

太宰と親しく話すようになったのも、たしか二年になってからだと思う。太宰は本名を津島修治といい、青森中学の出身である。彼は文科甲類（英語を第一外国語とする組）で私とはクラスが違っていたし、入寮せずに親戚の家から通学していたので、最初の頃はあまり顔を合せる機会がなかった。

津島を私に紹介したのは、彼と同級だった三浦正次（現在、足利銀行重役）である。津島はその頃、自費で『細胞文芸』なる同人雑誌を発行していたので、三浦を通じて、文芸部の委員だった私の勧誘に來たのである。